



『哺乳類の生物地理学』

増田隆一編著

2017年6月
東京大学出版会 発行
183頁
定価（本体 3,800円＋税）

中本篤武・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学類）

従来、生物地理で研究対象になるのは地史と密接に関わる在来種とされてきた。ところが、本書カバーは、なんと外来種ハクビシンの大写真！ 刺激的ではあったが、本書第7章「外来種の生物地理学」を一読すれば氷解。そもそも、対象動物が分布する歴史的解析（要するに生物地理の知見）が欠如している状態で、当該種が在来なのか、外来なのかを判断することは難しい。宿主-寄生体関係の生物地理を志向したい浅川は、日々、実感。特に、疾病原因にもならない（＝研究に関わる全てが投資されない）寄生虫では、それが在来種 / 外来種の峻別自体が難しい。さらに、宿主の在来 / 外来性も不明な場合もあり、混沌状態となることも屢々。しかし、宿主-寄生体関係の生物地理学的解析により、外来寄生虫が在来宿主に寄生する（逆もまた然り）曼陀羅が朧気ながら見えてきた。このような状態を1つ1つ整理し、理解していけば、新興寄生虫病の予防などに繋がろう。

長くなった。以上のお話しは、本書著者が編集した書籍（浅川，2005）にも寄稿したので、そちらをご覧になって頂くとして、以下、動物園獣医師を目指すゼミ生の本書コメントを堪能したい。もちろん、多くの動物園が今なお、生物地理学的展示をしている点で、この学生にとっても、きっと、有益な機会となったに違いない。（文責 浅川）

本書は日本および周辺地域に分布する食肉類をモデルに生物地理学を解説したもので、以下の太字カギ括弧の章で構成されている。「**生物地理学とはなにか**」：生物地理学の研究史と、最新の分子系統学発展についての解説である。自分（中本）は図鑑から、ある動物の生息地を知るという行為は何度も経験したが、その生息地にどういった経緯で定着したのかについては、まったく考えたことがなかったので、新鮮であった。「**進化の生物地理学**」：日本に固有種が多い理由を解説している。島による地理的隔離は想像できたが、大陸で絶滅した結果、たまたま日本で遺残したため固有種化したという視点は無かったので驚いた。クジラの起源、ヒグマとホッキョクグマの関係も興味深かった。「**境界線の生物地理学**」：北海道産ヒグマの系統解析と考古学的試料によるDNA分析について紹介されていた。ミトコンドリアDNA配列から、北海道のヒグマは遺伝子的に3つに分かれ、それぞれの系統が国外にも生息し、そこを辿っていくことにより、由来が解明されていく過程は生物地理学の醍醐味であった。「**固有種の生物地理学**」：在来および外来イタチ類をモデルにした研究事例であり、地理的隔離とう現象をより具体的に学べることができた。「**ミクロの生物地理学**」：糞や体毛などの分子生物学的な分析の応用研究事例であった。糞にはPCR阻害物質があるというのを知り、非常に驚いた。「**都市動物の生物地理学**」：キツネとタヌキを例に挙げて解説している。自分（中本）は本州から北海道に来たので、これほどキツネが札幌のような都市部に定着していることに、純粋に驚いた。「**外来種の生物地理学**」：ハクビシンの問題（冒頭参照）について、海外から動物を安易に移動させる危険性を強く実感できた。「**生物地理学の課題**」：今日のように、SNSが無かった時代でも、積極的に世界中の人々とコンタクトをとりながら、研究を続けていたことがよく伝わってきた。

本書により分子生物学の有用性について、詳細に把握できたことはもちろん、「おわりに」にあった身近な「すごい人」から、その考え方を認識、吸収する姿勢は、今後のヒントになった。自分（中本）も、このことを忘れず、残りの学生生活を有意義なものにしたい。（文責 中本）

引用文献

浅川満彦. 2005. 書評『増田隆一・阿部 永 編著 動物地理の自然史—生物多様性の謎を解く』. 野生動物医学会ニュースレター *Zoo and Wildlife News* (20): 58.